

## 社会心理学における道徳判断研究の現状

唐沢 穰<sup>(1)</sup>

### 1. 道徳判断研究の隆盛

近年、実証的心理学の分野では道徳性に関する研究において、重要な変化が起こりつつある。まず、理性中心の人間観から直観のはたらきを重視する理論への転換、そしてこれを支持する実証的証拠の蓄積が挙げられる (e.g., Gigerenzer, 2008; Haidt, 2007)。古典的な道徳心理学においては、人間が道徳的規準に照らして何を「善」または「正しい」とし、また何を「悪」や「誤り」であると判断するかは、本来的には理性に基づくものであるとされた。一方、理性に反する心理過程、特に感情の影響などが非道徳的行動の原因になると考えられるのが通常であった。言うまでもなくこれは、規範的観点から導出された道徳概念が前提となっていたためであると考えられる。これに対し近年では、人間の道徳判断がいかに関観に基づき、必ずしも熟慮を経ない性質を持っているかを示す知見が次々に報告され、これに関する理論的な説明の試みも成功を収めている (Haidt, 2001; 2012)。

変化の第二は、研究分野の拡大である。かつて心理学において道徳研究と言えば、その代表格は発達心理学研究であった。上の指摘とも関連するが、そこでは人間の理性的な能力、分けでも「知能」の発達が、道徳性の発達といかに関わっているかを調べるのが、主な課題であった。独創的な発達理論と実証研究で大きな功績を残したPiaget (1932/1965) や、その系譜を継いだKohlberg (1981)、Turiel (1983) らは、いずれも知的発達と道徳性発達の間の密接な関係を論じている。しかし近年では、認知心理学を含む認知科学全般、社会心理学、そして文化心理学や進化心理学といった広範な分野で、道徳判断の基礎をなす心理的過程の解明や、社会行

---

(1) 本稿の内容について名古屋大学大学院環境学研究科・社会心理学ゼミの皆さん、および講義『社会環境認知論』の受講生諸氏とのディスカッションから多大な示唆を得た。同研究科・田邊宏樹准教授からは貴重な助言をいただいた。法と心理学会第13回大会 (2012年) ワークショップ『道徳研究の最前線』への出席者との議論も大きな刺激となった。以上の皆さんに感謝したい。本稿の執筆に際して文部科学省科学研究費 (新学術領域研究: 23101002) および日本学術振興会科学研究費 (挑戦的萌芽研究: 23653170) の補助を受けた。

動における道德性の吟味が盛んに行われ、流行と呼んでもよいくらい大きな潮流を形成している (e.g., Bartels, Bauman, Skitka, & Medin, 2009; Sinnott-Armstrong, 2008)。併せて、行動経済学や実験哲学といった心理学以外の領域との学際的連携も進展している。

道德研究におけるこのような変化が特に顕著に見られるのが、本稿が焦点を当てる社会心理学の分野である。標準的な社会心理学の教科書に「道德性」や「道德判断」に関する章が設けられることは、これまで皆無に等しかったし、その状況は現在でもほとんど変わらない。ほぼ唯一の例外として、「愛他的行動」(altruistic behavior) や「援助行動」(helping) が伝統的に独立した章として扱われてきたことが目につくくらいである。ところがここ数年、“moral”や“morality”という語を含む論題を冠した研究論文の数が急増している。少し以前であれば、単に偏見や集団間葛藤の研究として、あるいは社会的ディレンマ状況における意思決定の研究として、また態度と行動意図に関する研究として報告されたであろうものが、道德性の観点から論じられるようになってきたのである。以下では、こうした近年の動向が持つ意義について論考するとともに、今後の研究に求められる課題を順次指摘することを試みる。

## 2. 道德判断過程の理論モデル

心理学全体で起こりつつある道德研究ブームの、火付け役となったひとりがJonathan Haidtである。彼の提唱する、道德判断過程に関する「直観型人間モデル」(intuitionist model) と、通文化的な道德判断基準について論じた「道德基盤理論」(moral foundation theory) は、社会心理学にとって重要な示唆を数多く含んでいる。その主な意義は、以下の3点に集約することができる。すなわち、(1) 道德的判断の心理的基礎過程として「直観的」対「理性的」情報処理という二過程モデルを提唱したこと、(2) 旧来の道德研究で想定されてきた「他者に危害を加えない」「公正な社会的交換を行う」といった典型的な道德基準以外の分野にも、通文化的な道德的基盤が見出されるという人類学的洞察、(3) それらの道德基盤に基づく個人の行動や社会制度の運用が、コミュニケーション機能を備えているという指摘、である。それぞれの詳細について以下に述べる。

**認知的二過程モデル** 心理学において「意識」と「無意識」の区別が伝統的に重要な意味を持つのは言うまでもない。この問題について実証的なアプローチを可能にしたのは、1980年代以降の認知心理学における、「自動的」(automatic) および「統制的」(controlled) 情報処理過程に関する区別であった。特に、連想ネットワーク・モデルに基づく理論構築の成功と、プライミングをはじめとする実験手法の洗練により、認知的労力を比較的必要とせず認知的負荷などの影響を受けにくい自動的過程と、認知資源の投入や熟慮を要するため認知的負荷の影響を受けやすい統制的過程を、操作レベルで区別することが可能になった(北村, 2013)。その結果、「意識と無意識」に関わる数々の新たな現象の発見や、理論的説明の発展がもたらさ

れた（概括的な解説書としてはHassin, Uleman, & Bargh, 2005などを参照）。社会心理学もその影響を強く受けて、集団や社会的カテゴリーに対する偏見やステレオタイプ（Devine & Sharp, 2009）、説得的メッセージの処理過程（Eagley & Chaikin, 1993; Petty & Cacioppo, 1986）、自己評価（Greenwald & Banaji, 1995）、目標達成行動（Bargh, Gollwitzer, & Oettingen, 2010）など多様な問題領域で、自動的・統制的の二過程によって社会的認知の実態を理解しようとする試みが重ねられた（Gawronski & Payne, 2010）。

こうした背景のもと、Haidt（2001）の直観型人間モデルが試みた論法は、社会心理学者にとって馴染みの深いものであると言える。例えば彼が行った最も初期の研究では、「国旗を切ってトイレ掃除に使う」「車にはねられた犬の死体を調理して食べる」など、それが誰にとっても害がないことを明記してはあるが多くの人々が嫌悪感をいだくシナリオを、実験刺激として提示した（Haidt, Koller & Dias, 1993）。すると、これを読んだ実験参加者は、各行為を不道德だと判断しただけでなく、シナリオから排除されているはずの「害となる理由」を根拠として挙げようとするのが示された。そして、有害であるという説明がつけられないことを悟ると、「理屈抜きで悪いことは悪い」と結論するしかない状況に追い込まれるのであった。こうした一連の結果は、「不道德である」というヒューリスティックに基づく判断が先行し、それを論理立てようとするシステマティックな過程が追従したものと理解することができる<sup>(2)</sup>。直観型人間モデルは、知的で合理的で理性的な人間性の発達こそが道德性の本質であるとする、従来の道德心理学の前提に真っ向から挑戦した点で、画期的な試みであったと言える。

ところで旧来の道德観においては、「感情」を「理性」よりも下等で動物的なものと位置づける傾向があった。そして、不道德な行動とは感情が暴走したものであり、これを理性の力によって統制することにこそ人間の道德的本性があるとする考え方が主流であった。これに対してHaidtらは、理性的推論（reasoning）に対比させるべきものは直観的な「情報処理過程」であって、そこに感情が含まれるか否かは、もはや重要な問題ではないと明言する（Haidt, 2012, p. 48）。そして、道德判断の初期段階で発動する直観的過程とは、「パターン認識」（pattern matching）のような性質のもので、その中には感情を伴うものもあるかもしれないが、錯視のように感情を伴わない性質を持った判断過程も存在すると主張する。「直観」対「理性」という区別に基づく認知的二過程モデルは、他の認知科学諸領域においても広く認められる考え方であり、十分に説得力を持つものと言うことができる（Gigerenzer, 2008）。

今後の実証研究においては、「直観的」「理性的」として区別される道德情報の処理過程について、それぞれがどのような認知的特質を備えているのかを明らかにすることが必要である。すでに、判断の際に要する認知的負荷を操作することによって、各認知過程の影響を調べるこ

(2) 道德判断以外の領域でも、直観的判断と合理的の情報処理過程に関わる同様の現象を見出すことができる。

古典的な例としてKinder & Sears（1981）は、人種統合政策と直接には利害関係のない白人アメリカ人が、黒人に対する自己の直観的な嫌悪を利害関係で説明しようとする傾向を報告している。

とが試みられている (Greene, Morelli, Lowenberg, Leigh, Nystrom, & Cohen, 2008)。

さらに、神経科学的分析による二過程モデルの検証にも重要な貢献が期待できる。これまでの研究では、強い感情を喚起すると考えられる反道徳的行為 (「5人を乗せた暴走トロッコを止めるために、線路の上にかかる橋から1人を突き落して下敷きにすることができるか」) について判断を行う際には、感情の生起や制御、そして他者の感情を理解する過程と関連することが知られている部位 (内側前頭前皮質 medial prefrontal cortex や後帯状皮質 posterior cingulate cortex: PCC など) に、顕著な賦活が見られることが報告されている (Greene, Sommerville, Nystrom, Darley, & Cohen, 2001)。一方、道徳的是非の判断が難しい課題になるほど、理性的な情報処理過程と関連するとされる領野の活動が増加することも明らかになっている。すなわち、矛盾を検知する過程でしばしば観察される前帯状回 (anterior cingulate cortex: ACC) や、統制的な情報処理過程との関連が指摘される前背外側前頭前野 (anterior dorsolateral prefrontal cortex: aDLPFC)、および下頭頂小葉 (inferior parietal lobule: IPL) などの賦活が見られたのである (Greene, Nystrom, Engell, Darley, & Cohen, 2004)。また、「1人の命を犠牲にしてでも5人が救えるならその方が道徳的には正しい」といった判断が行われたときと、「たとえ5人のためでも1人を死に至らせることは正しくない」などとする判断が行われたときとを比較した結果、前者の場合は aDLPFC や IPL の活動が増大していた。つまり功利主義的判断と理性的推論過程との関連が示されたのである (Greene et al., 2004)。もっとも、この著者ら自身も認めるように、これら認知的統制と関連する部位だけでなく、情動反応と関連が深いとされる PCC にも賦活が見られたことなど、十分な説明が難しい点も残っている。つまり、「感情」対「認知」という区別だけで道徳判断過程の全貌をとらえ切れるわけではないことに注意が必要である。先にも述べたように、Haidt の理論モデルにおける直観的情報処理過程は、「感情」と必ずしも同一視できるものではない (Haidt, 2012)。したがって、「感情-理性」の枠組みで解釈された脳神経科学的知見を、「直観的」対「理性的」道徳判断とどのように関連づけるかについては、今後さらに詳細な吟味が必要である。

**通文化的な道徳基盤** 「他者に危害を加えない・擁護する」こと (Harm/Care) や「公正な関係を維持する」(Fairness) ことは、多くの文化ではほぼ普遍的に、道徳性の主眼となっていると考えられる<sup>(3)</sup>。Piaget, Kohlberg, Turiel といった発達心理学者たちが取り上げた道徳領域も、概ねこの二つに絞られる。これに対し道徳基盤理論は、「内集団への忠誠」(Ingroup)、「権威と階層への敬意」(Authority)、「純潔・神聖」(Purity/Sanctity) も多くの文化において今日もなお、しばしば道徳性の基準として適用されることを強調する<sup>(4)</sup>。

(3) 「道徳的」という意味では前者を“Not Harm/Care”と表記する方が理解しやすいが、ここでは Haidt が一貫して用いている呼称を示した。なお Haidt (2012) では道徳性の方を強調するためか“Care/Harm”の順で表記されている。

(4) Haidt (2012) はこのほかに、「抑圧からの解放」を挙げている。また、最近では同じ研究グループが「浪



道徳基盤理論の特徴は、道徳判断の起源を進化的適応の観点から説明している点にある。ヒトの適応過程には、各自の遺伝情報を残すための個体間競争だけでなく、他者との協力によって集団を維持することで、自らの適応度をむしろ高めているという可能性が考えられる。他者を攻撃せず「擁護（配慮）」の態度を示すことや、物理的・社会的資源の「公正な」交換を行うことは、利他的な性格や態度を示すシグナルとなり、ひいてはそれが集団内の互恵的利他性を醸成する基盤ともなるであろう。また、集団内での協力には常にfree-riderが出現する可能性とのディレンマが伴うが、これを監視するための機能としても、「擁護（配慮）」や「公正」という道徳基準による規制が必要となる。多くの文化に共通して、なぜ「擁護」と「公正」が道徳意識の基盤として備わっているところが観察されるのかという問いに対する、道徳基盤理論からの解釈は以上のとおりである。

これに加えてHaidtらは、「集団を単位とした適応と生存」というメカニズムの重要性を主張する（Haidt, 2012）。狩猟採集時代、農耕時代、さらには強大な権力による独裁体制下の社会において、集団の維持が重要な意味を持っていたのは言うまでもないが、都市の形成とインフラストラクチャーの構築、さらには民主主義のような政治体制の維持においてすら、ときには個人の利害を超えた集団レベルの道徳基準が優勢となる局面があることを、この理論は強調する。実際、政治的イデオロギーを個人差変数として分析を行うと、現代的な民主主義社会においてもなお、集団の適応を旨とした道徳意識がしばしば発動されることを、実証研究は示している。すなわち、英語圏を中心とした大規模調査研究の結果は、リベラルな政治的イデオロギーの保持者が、「擁護」「公正」のみを道徳的イシューと見なすのに比べ、保守主義者は「内集団」「権威」「純潔」を含むすべての問題を道徳の観点でとらえようとする傾向があることを示している（Graham, Haidt, & Nosek, 2009）。

道徳基盤理論が登場する以前の道徳心理学研究は、西欧的な文化に典型的な道徳観を中心に行われてきたとすることができる。これに対して、西欧化の影響を受けながらも伝統的な文化的価値を随所に残している日本のような社会にあっては、従来あまり議論されなかった新たな種類の道徳基盤の発見と、それについての実証的検証の可能性が期待できる。なぜなら、知覚過程のようにかなり低次な認知過程においても、文化間で異なる様式が見られることが明らかになっているからである（e.g., Miyamoto, 2013）。例えば日本社会では、「勤勉」や「清潔」について、道徳的とも言える価値意識が日常的に観察される。これらが実際に道徳基盤として作用しているか、また、もしそうであるなら、それぞれの道徳意識が持つ適応的機能はどこにあるのかなどについて、検討できるはずである。

**コミュニケーションの役割** Haidtらによる道徳判断モデルが社会心理学研究にもたらす意義を論じる際に、見落としてはならないのが、コミュニケーション機能の重要性に着目している

点である。まず直観に基づく道德判断が喚起され、次に合理的な論理に基づいてこれを正当化するための「説明」の過程が、事後的に駆動されるという想定は先述のとおりであるが、その正当化が誰に対して行われるかという、それは自らの理解のためというよりも、むしろ他者に理解の共有を求めるための説明であるというのがHaidtらの主張である。では、直観に基づく道德判断は、なぜそれに対する他者の理解や賛同を必要とするのであろうか。

ここでも重要な説明原理となるのが、道德判断とその正当化が持つ、進化的適応の機能である。すなわち、集団内で自身が信頼に足る人物であること、つまりfree-riderではないことを、内集団成員に認識させることが生存の重要な条件となるという主張である。互恵的協力関係から拒絶され孤立することは、人間社会において死を意味するに等しい。したがって、「真実において」いかに道徳的にふるまうかよりも、他の内集団成員から見て道徳的に映るようふるまうこと、他者に対して自己の道徳性を効果的に宣伝することの方が、重要な課題であることになる。社会生活を営む人間のこうした基本的性向を、Tetlock (2002) は「直観的政治家としての人間」(person as an intuitive politician) というメタファーで特徴づけているが、道德基盤理論もこの前提を共有している。こうした「政治性」は、自己呈示 (self-presentation) 行動、印象管理 (impression management)、偽善的道德性 (moral hypocrisy) といった、対人関係の研究で古くから取り上げられてきた現象について、新しい解釈を提供するものとなるであろう。同様に、自己義認傾向 (moral self-licensing; Miller & Effron, 2010 を参照) の現象とも関連が深い。これは、過去に道徳的な行為をした個人ほど、自己概念の一部に「道徳的資格意識」が形成されるため、後にかえって反道徳的行動を示しやすくなるという現象である。実際、慈善活動や援助行動に加わった人物が、後に差別的行動を示したり、微罪を犯したりするといった効果が確認されている。道徳性を、単に個人内において形成されるものとするのではなく、オーディエンスに向けた宣伝活動の一環として捉える枠組みは、検証可能な新たな仮説を数多く生み出すことが期待できる。一般に、コミュニケーションの内容は、オーディエンスの持つ好みや態度、価値観と整合する方向に変容・調整されることが知られている (Higgins & Rholes, 1978)。さらに重要なことに、受け手に向けて調整をされたはずのコミュニケーション内容が、言わば反射するように送り手自身の好みや態度、さらにはオリジナル情報の記憶までも歪めることも示されている (Echterhoff, Higgins, & Levin, 2009)。つまり、コミュニケーションに基づく態度形成と記憶の過程には、再帰的な効果が見られるのである。こうした循環的現象が、道徳性をめぐって生じるかどうかについての検討は、これまでのところ全く行われていないに等しい。今後の重要課題と言えるであろう。

また、偽善や誇張、根拠のない自己宣伝の可能性があるところでは、逆にこれを監視し、ただ乗りを暴く機能も必要となる。すなわち、規範遵守を実現させ、違反者には懲罰を加えるサンクションの機能である。この機能は、もちろん社会制度の形をとって実現されているが、人間の認知的・動機的性質として内面化されているという指摘も可能である。先述のTetlock (2002) が、認知過程の機能性に関する第二のモデルとして提唱した「直観的検事としての人間」

(person as an intuitive prosecutor) がそれである。これは、対人認知の分野で頑健性が確認されてきた基本的原理についての知見と合致する。すなわち、人は一般に、他者の行動の原因を、環境要因よりも行為者の性格や動機、態度などの傾性 (disposition) に帰着させやすく (Gilbert & Malone, 1995; Uleman, Blader, & Todorov, 2005)、意図性の有無を中心にしながら行為の意味を解釈しようとする傾向をもち (Malle, 2001)、しかも後にも述べるように、社会的公正を希求し、反規範的行為に対しては懲罰傾向を示す。これらの傾向が「直観的検事」モデルと符号するのである。

### 3. 道徳的動機に関する考察

Haidtらの理論は、個人レベルあるいは集団レベルにおける進化的適応にとって不都合な行動が出現すると、それに対してモジュール化された認知過程が誘発されるという前提に立つものである。これとは異なる観点から、当事者間においてどのような種類の「関係」が心理的に構成されるかによって、適用される道徳基盤が変化すると考えるのが、心理人類学者 A. P. Fiske らによる「関係モデル理論」(relational models theory) である (Rai & Fiske, 2011)。Fiske (1992) は、人が自己と他者との社会的関係のどこに注意を向けるか、つまり社会的関係についてどのような心的モデル (mental models) が駆動されるかが、その関係への対処のしかたを規定すると主張した。ここで問題となる心的モデルとして、次の4類型が多く文化を通じて見られると言う。すなわち、(1) 共同体的な共有関係 (communal sharing)、(2) 権威を根拠とした階級づけ (authority ranking)、(3) 平等原則によって資源を配分する関係 (equality matching)、(4) 各人の市場価値をめぐる競争の関係 (market pricing) である。それぞれは、当事者間の (1) 共通性、(2) 序列性、(3) 差異、(4) 比率によって、操作的定義を与えることができる。そして、各当事者が、当該関係をどの類型で理解して相互作用に臨むかによって、各人の行動の内容や動機 (例：目標に接近しようとする動機や危険を回避しようとする動機)、それに対する評価 (例：満足や不満足)、さらにはその帰結 (例：適応と不適応) が変化すると考える。また、どのような関係ではどのような行動が適切と見なされるかについて、集団成員間の了解や規則が存在すると想定する (Haslam, 2004)。

関係モデルの類型化は、これに随伴する道徳的動機 (moral motives) の理解についても有用な枠組みを提供する。人間の社会的動機にはさまざまなものが想定される。例えば後にも述べるように「能力に応じた衡平 (equity) を希求するか、平等 (equality) を求めるか」といった資源の配分に関する原理をめぐっても、しばしば複数の動機が混在することは、社会的公正をめぐる心理学的研究において古くから指摘されている (e.g., Walster, Walster, & Berscheid, 1978)。このうち、どの動機が道徳的観点から見て適切であると認識されるかは、その状況下で活性化した関係モデルによると考えることができる。すなわち、顕在化した社会的関係の維持や発展に寄与する行為には「道徳的である」という意味が付与され奨励されるのに対し、そ

表1. 関係モデル理論と道徳的動機

関係モデル	関係の指標	関係維持のための 道徳的動機	道徳的行動の例
共同的共有 Communal Sharing	共通性 類似性	連帯 Unity	同胞愛、援助、犠牲
権威と階級 Authority Ranking	序列	階層化 Hierarchy	服従、権力者による保護、神聖さ
平等による調和 Equality Matching	差異	平等 Equality	平等な分配
市場価値の評価 Market Pricing	比率	応分 Proportionality	自己呈示、功利性、勤勉、儉約

Rai & Fiske (2011) をもとに作成

の関係にとって障害となる行為が「不道徳」として禁止されるのである。こうした、関係モデルと道徳的動機の相互関係をまとめたのが表1である。

関係モデル理論は、同一の行為であっても、それを当事者や周囲の社会（共同体）がどのような心的モデルを用いて解釈するかしだいで、道徳・不道徳の判断が変動するという事実を巧みに説明する。例えば、他者に危害を加えることは一般に不道徳と見なされ (Haidt, 2001)、殺人などは極刑をもって処せられることもある。しかし、集団の連帯を脅かす行為に出た者については、むしろこれに害を与え、場合によっては命を奪うことすら、かえって道徳的だと判断されることもある（例えば「名誉のための処刑」）。また、勤勉であることは、当人の市場価値を高めるという観点から見れば奨励されるべき行為かもしれないが、それが集団の成員間に格差をもたらす行為だと解釈されれば否定的評価を受けるであろう。社会的関係といった文脈依存の変数が、何が道徳的であるかを決定するという、力動的な過程を洞察した点が、この理論の主な貢献である<sup>(5)</sup>。

社会的関係の認識に基づく道徳的動機を分類したFiskeらの試みは、さらに別の分野での動機づけに対する注目をも触発している。心理学において、伝統的に研究者の関心を集めてきた

(5) ここに紹介したHaidtとFiskeの理論モデルは、いずれも道徳判断の通文化性に注目するなど、互いに多くの類似点・共通点を持っている。「道徳基盤」「道徳的動機」の分類内容に多くの共通点があることは一目瞭然であろう。また、「直観に基づく情報処理過程」や「動機」という、意識的で理性的な情報処理過程とは対照的な心理過程の重要性を強調する点でも一致している。こうした関連の由来が、二人がともに文化人類学者Richard Shwederの薫陶を受けたという背景にあることは、両者も認めるところである (Fiske, 2004; Haidt, 2012)。Shwederは道徳判断以外の分野でも、今日の文化心理学の基礎をなす多くのアイデアを提供した人物である。社会心理学の分野で、人間の認知や行動傾向の文化的基盤を考慮することの重要性に関する認識は急速に高まっており、こうした潮流が近年の道徳性研究への関心をさらに促す一因となっていると考えられる。



動機づけに、達成動機づけ (achievement motivation) がある。そして、この分野を代表するのが、Higgins (1998) による「制御焦点理論」(regulatory focus theory) である。この理論によると、ある目標達成に成功することに焦点をおくか(「促進焦点」 promotion focused)、失敗を回避することに焦点をおくか(「防衛焦点」 prevention focused) によって、同じ達成を果たすにしても採用される戦略が異なると考えられる。また、促進焦点のもとでは、「現実自己」(actual self) と「理想自己」(ideal self) との乖離に注意が向けられ、これを縮小しようとする動機づけがはたらくのに対し、防衛焦点のもとでは現実自己と「当為自己」(ought self) との関係に注意が向けられることも知られている。こうした、異なる制御焦点と動機づけの機能に関する知見を拡張して、Janoff-Bulman & Carnes (2013a) は「道徳動機モデル」(Model of Moral Motives: MMM) を提唱している。彼女らは、道徳的行動を促進する「指示的(処方的)制御」(prescriptive regulation) と、非道徳的行動を禁止する「禁止的制御」(proscriptive regulation) を区別する。また、それぞれの制御動機が誰を対象とした行動において発動されるかによって、「対自己」「対他者」「対集団」の3つの異なるレベルに区別できると指摘する。これを図示したのが表2である。

この図式によると、Haidtらが指摘した「擁護/危害」「公正」の二大道徳基盤は、それぞれ「対他者」レベルにおける禁止的制御および指示的制御に相当し、他の「内集団」「権威」「神聖」はすべて「対集団」レベルの禁止的制御として位置づけられる<sup>(6)</sup>。すでに述べたようにHaidt (2007; 2012) は、政治的にリベラルな層の重視する道徳基盤が前者2種類に限られるのに対し、保守主義者は後者の3種類を含むすべてを強調することが、集票における保守政党(アメリカ合衆国ならば共和党)の有利さにつながることを繰り返し指摘している。これに対しJanoff-Bulmanらは、MMMをもとに、集団レベルの指示的制御に基づく積極的道徳観、具体的には社会的正義の実現や共同体の責任への訴えかけが、リベラル層に対しても説得力を持つはずだと主張している(両理論の比較対照については、Graham (2013) の批評およびJanoff-Bulman & Carnes (2013b) の応答も参照)。

MMMは、接近-回避あるいは促進-予防という、達成動機づけの分野で伝統的に用いられ

表2. 道徳的動機と制御機能の関係

	対自己 (personal)	対他者 (interpersonal)	対集団 (collective)
<b>禁止的制御 (proscriptive)</b> 擁護・抑制 Protect/Inhibition	自己制御/謙虚	危害を加えない	社会秩序/ 共同体の団結
<b>指示的制御 (prescriptive)</b> 提供・活性化 Provide/Activation	勤勉	援助/公正	社会的正義/ 共同体の責任

Janoff-Bulman & Carnes (2013a) をもとに作成

(6) Rai & Fiske (2011) が挙げた道徳的動機も、主にこの3つのセルと対応していることになる。

てきた心理学的説明原理を用いて、作為が結果的に道德的（または不道德）と判断される場合と、逆に不作為が道德的な意味における判断に付される場合との違いを、体系的に説明することに成功している。また、これまでに述べた道德心理学の諸理論が比較的注意を払っていなかった、自己の行動に関する道德判断や、集団内だけでなく集団間の行動も射程に入れるなど、包括的な議論を提供している。道德判断の起源を、生物学的・人類学的概念である行動進化的原理に求めず、動機づけの原理と対人関係の文脈という、(社会)心理学に固有の概念ツールで体系的説明を試みた点も特徴的である。また、この分野の議論でしばしば考察対象となる、保守主義ーリベラル主義のほかに、リバタリアンとコミュニタリアンを、「対集団」と「それ以外」の区別に対応づけることを提唱するなど、さまざまな政治思想的傾向を、道德の図式との関連で整理している。今後、さらに多くの実証的仮説を生み出す理論枠組みとなることが期待できる。

#### 4. 道德判断と社会的公正観

社会心理学の下位領域の中で、伝統的に道德判断の研究と関連が深いのが、社会的公正判断(judgment of justice)に関する研究である<sup>(7)</sup>。社会的交換理論の観点が心理学に導入されると、それは直ちに、資源の配分に関わる「平等」(equality)の原則と「衡平」(equity)の原則に関わる公正観の研究を生んだ(Walster et al., 1978)。特に、人々が後者を公正であると判断するのが、どのような心理的メカニズムに基づき、またどのような要因に規定されるかについて、当時の社会心理学において優勢であった認知的斉合性理論(cognitive consistency theory; Heider, 1958など)を援用した説明が試みられた。「人間は各自の資質や努力に相応の結果を得るのが正当である」とする素朴理論である「公正世界信念」(belief in just world)の概念(Lerner, 1980)も、一種の衡平性認知を原理として提唱されたという点で共通している。

その後、配分内容に関わる公正観(分配的公正 distributive justice)だけでなく、配分手続きに関わる公正観(手続き的公正 procedural justice)の重要性を指摘する研究が数多く登場した(Lind & Tyler, 1988)。こうした公正研究の発展の中で、近年では、より直接的に道德意識と関わる心理過程について、理論構築や実証的検討が行われるようになってきている。その中でも注目されるのが、反規範的行動をとった者に対する懲罰動機の研究である。すでに述べたTetlock(2002)の指摘にもあるように、一般に人々は「直観的検事」としての性質を持っている。すなわち、違反行為が意図や目的に基づくものであるかを瞬時に、しかもかなりの精度で見わけることができ(Malle, 2001; Hassin, Arts, & Ferguson, 2005)、因果関係の同定を含む事実認定を行い(Weiner, 2006)、行為がどの程度の懲罰に値するかという量刑判断をも直観的に行っている。

(7) 社会心理学における justice の概念は、政治哲学や法哲学における「正義」ほどの意味を持たず、fairness とほぼ同義と見なせる場合がほとんどである。これは、「何をもって『正しい』とすべきか」を問う規範論的議論に比べ、人がその日常感覚において「何を『正しい』と知覚し判断するか」を問題とすることが多いためであると考えられる。

ると考えられる (Darley, 2009)。

刑事法学における議論と同様に、心理学においても人が違反行為を罰しようとする基礎には少なくとも2種類の異なる動機が作用している可能性がある。その第一は功利主義的な判断過程で、いわゆる一般予防と特別予防の考えに対応する。犯罪の抑止、違反者の資格剥奪と隔離、さらにはその更生などに関する効果に対する期待が基礎となっている。これと対比されるのが「応報的公正観」(retributive justice)による懲罰で、社会的に共有された価値に対する毀損の修復と報復を主な動機とし、行為に対する道徳的義憤(moral outrage)を伴うものであると想定される。北米などにおける一般人を対象とした実証研究は、双方の動機が懲罰意識を規定することを示しているし(Carlsmith & Darley, 2008; Darley, 2009)、わが国における最近の法意識調査においても、国民の多くが、犯罪者を懲罰する理由として功利主義的理由と応報的理由の両方を挙げている(松村・木下・太田・山田, 2011)。また、犯罪行為を描いた小話を呈示した後、それがどの程度の刑に値するかを判断を求めるというシナリオ実験の手法を用いた研究結果も、量刑判断に応報的要因が影響を与えることを示している。すなわち、シナリオに描かれた犯罪の罪質(重罪vs. 軽罪)、故意性の有無、結果の重大さなどの変数が、量刑判断の要因となっているのである(Carlsmith, 2006; Karasawa, 2012)。これらの変数は、実際の刑事司法においても、量刑判断の基準として用いられているものであり、その根拠は主として応報刑の観点に基づくものである。そして、功利主義的計算と応報的動機の影響力を直接比較した実験的研究の結果は、全般に前者よりも後者の方が比較的大きな影響を及ぼすことを示している。さらに、応報的動機においては道徳的義憤の介在が鍵となっていることも明らかになっている(例: Carlsmith, 2006; Carlsmith, Darley, & Robinson, 2002; Karasawa, 2012)。もっとも、功利主義的動機であれ応報的動機であれ、それぞれのどの側面を重点的に吟味するかは、研究者間で若干の差異が認められる。多くの研究を俯瞰した上で包括的な議論を行うことを可能にするような実証研究が、今後はさらに必要である。

また、犯罪行為の性質だけでなく、行為者の人格、分けても人格的道徳性に関する認知が量刑判断に影響することも明らかになっている。例えば、無銭飲食の事案を記述したシナリオにおいて、犯人が道徳的に優れた人物、または劣った人物であると記述すると、事案中に記されていた飲食請求代金に関する記憶の歪みが、後者でより大きくなることを示す実験結果がある(Pizarro, Laney, Morris, & Loftus, 2006)。また、民事事案ではあるが、速度超過運転による交通事故のシナリオを用いた別の実験では、運転者の道徳性の優劣を、「両親を驚かすためのプレゼントを隠そうとして」あるいは「自宅に置いた麻薬を隠すため」という記述で操作した。すると前者よりも後者の方が、事故の原因として、より責任追及されやすかった(Alicke, 1992)。これらの結果はいずれも、違反者の道徳的人格性が、客観的事実の認識にさえバイアスを生じさせることを示している。さらに、人格的道徳性は懲罰動機にも影響を与え、より過酷な尋問を行って差し支えないとか(Carlsmith & Sood, 2008)、量刑を多くするのがふさわしいといった判断を喚起することが明らかになっている(Karasawa, 2012)。

以上に述べたように、社会心理学の中でも比較的長い歴史を持つ社会的公正観の研究は、利益の獲得や資源の配分に関わる公正の問題から、道徳性判断と直接関わる問題へと内容を変化させてきた。これも本稿が繰り返し言及する道徳研究ブームの一環と位置づけることができる。また、応報的公正観の基礎として道徳的義憤の役割が重視されている点なども、Haidtらの直観型人間モデルと一致する。

## 5. 結語

過去10年ほどの間に、なぜ社会心理学の多くの問題が「道徳」の枠組みで議論されるようになったのか、その理由は必ずしも明白ではない。社会心理学のテーマが伝統的に、北米や西欧社会の持つ問題意識をもとに発想されてきたことを考慮すると、「文明の衝突」や「対テロ戦争」という現実を抱える国際情勢や、先進諸国においてさえ広がるとされる貧富の格差、あるいはイデオロギー的対立による国家分断の危険性といった状況が、宗教やイデオロギーに内包される道徳的価値の影響力への関心を、研究者の間に改めて呼び起こしたのかもしれない。また、文化心理学や進化心理学の発展によって蓄積された人類学的な知見を、感情や認知過程に関する実証的検討に取り入れることに対する抵抗が少なくなったことも影響しているであろう。そして、政治哲学や法哲学はもとより、実験経済学などの分野においても、「正義」の問題が取り上げられるようになったことが、心理学に少なからずインパクトを与えているはずである。本稿では紙幅の制約から、直観的情報処理過程、道徳基盤、道徳的動機、そして懲罰動機といった問題に的を絞って議論したが、道徳社会心理学の射程は今後もますます広がることが予測される。それに伴って、理論と研究方法の精緻化が一層進むことが期待される。

### 引用文献

- Alicke, M. D. (1992). Culpable causation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 368-378.
- Bargh, J. A., Gollwitzer, P. M., & Oettingen, G. (2010). In S. T. Fiske, D. T. Gilbert, & G. Lindzey (Eds.), *Handbook of social psychology*, (5th ed.), (Vol. 1, pp. 268-316). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Bartels, D. M., Bauman, C. W., Skitka, L. J., & Medin, D. L. (Eds.) (2009). The psychology of learning and motivation: Advances in research and theory (Vol. 50), Moral judgment and decision making. San Diego, CA: Elsevier Academic Press.
- Carlsmith, K. M. (2006). The roles of retribution and utility in determining punishment. *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 437-451.
- Carlsmith, K. M., & Darley, J. M. (2008). Psychological aspects of retributive justice. In M. P. Zanna (Ed), *Advances in experimental social psychology*, (Vol 40, pp. 193-236). San Diego, CA: Elsevier Academic Press.
- Carlsmith, K. M., Darley, J. D., & Robinson, P. H. (2002) Why do we punish?: Deterrence and just deserts as motives for punishment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 284-299.
- Carlsmith, K. M., & Sood, A. M. (2008). The fine line between interrogation and retribution. *Journal of Experimental*



- Social Psychology*, **45**, 191–196.
- Darley, J. M. (2009). Morality in the law: The psychological foundations of citizens' desire to punish transgressions. *Annual Review of Law and Social Science*, **5**, 1–23.
- Devine, P. G., & Sharp, L. B. (2009). Automaticity and control in stereotyping and prejudice. In T. D. Nelson (Ed.), *Handbook of prejudice, stereotyping, and discrimination* (pp. 61–87). New York, NY: Psychology Press.
- Eagly, A. H., & Chaiken, S. (1993). *The psychology of attitudes*. Orland, FL: Harcourt Brace Jovanovich.
- Echterhoff, G., Higgins, E. T., & Levine, J. M. (2009). Shared reality: Experiencing commonality with others' inner states about the world. *Perspectives on Psychological Science*, **4**, 496–521.
- Fiske, A. P. (1992). The four elementary forms of sociality: Framework for a unified theory of social relations. *Psychological Review*, **99**, 689–723.
- Fiske, A. P. (2004). Relational Models Theory 2.0. In N. Haslam (Ed.), *Relational models theory: A contemporary overview* (pp. 3–25). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gawronski, B., & Payne, B. K. (Eds.) (2010). *Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applications*. New York: Guilford Press.
- Gigerenzer, G. (2008). Moral intuition = fast and frugal heuristics? In W. Sinnott-Armstrong (Ed.), *Moral Psychology (Volume 2): The cognitive science of morality: Intuition and diversity* (pp. 1–26). Cambridge, MA: MIT Press.
- Graham, J. (2013). Mapping the moral maps: From alternate taxonomies to competing predictions. *Personality and Social Psychology Review*, **17**, 237–241.
- Gilbert, D. T., & Malone, P. S. (1995). The correspondence bias. *Psychological Bulletin*, **117**, 21–38.
- Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 1029–1046.
- Greene, J. D., Morelli, S. A., Lowenberg, K., Nystrom, L. E., & Cohen, J. D. (2008). Cognitive load selectively interferes with utilitarian moral judgment. *Cognition*, **107**, 1144–1154.
- Greene, J. D., Nystrom, L. E., Engell, A. D., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2004). The neural bases of cognitive conflict and control in moral judgment. *Neuron*, **44**, 389–400.
- Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., Cohen, J. D. (2001). An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment. *Science*, **293**(5537), 2105–2108.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4–27.
- Haidt, J., Koller, S. H., & Dias, M. G. (1993). Affect, culture, and morality, or is it wrong to eat your dog? *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 613–628.
- Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, **108**, 814–834.
- Haidt, J. (2007). The new synthesis in moral psychology. *Science*, **316**(5827), 998–1002.
- Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon Books.
- Haslam, N. (Ed.) (2004). *Relational models theory: A contemporary overview*. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Hassin, R. R., Arts, H., & Ferguson, M. J. (2005). Automatic goal inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, **41**, 129–140.
- Hassin, R. R., Uleman, J. S., & Bargh, J. A. (Eds.) (2005). *The new unconscious*. New York: Oxford University Press.

- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. In M. E. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 30, pp. 1–46). New York: Academic Press.
- Higgins, E. T. & Rholes, W. S. (1978). “Saying is believing”: Effects of message modification on memory and liking for the person described. *Journal of Experimental Social Psychology*, **14**, 363–378.
- Janoff-Bulman, R., & Carnes N. C. (2013a). Surveying the moral landscape: Moral motives and group-based moralities. *Personality and Social Psychology Review*, **17**, 219–236.
- Janoff-Bulman, R., & Carnes N. C. (2013b). Moral context matters: A reply to Graham. *Personality and Social Psychology Review*, **17**, 242–247.
- Karasawa, M. (2012, September). *Punishment of an immoral character as a just desert: A case of Japanese lay judgments*. Paper presented at the 14th Biennial Conference of the International Society for Justice Research, Tel Aviv, Israel.
- Kinder, D. R., & Sears, D. O. (1981). Prejudice and politics: Symbolic racism versus racial threats to the good life. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 414–431.
- 北村英哉 (2013) 社会的プライミング研究の歴史と現況—特性プライミング、目標プライミング、評価プライミング、感情プライミング、マインドセット・プライミングの研究動向—認知科学, **20**, 293–306.
- Kohlberg, L. (1981). *The philosophy of moral development: Vol. 1. Essays on moral development*. New York, NY: Harper & Row.
- Lerner, M. J. (1980). *The belief in a just world: A fundamental delusion*. New York: Plenum Press.
- Lind, E. A., & Tyler T. R. (1988). *The social psychology of procedural justice*. New York: Plenum.
- 松村良之・木下麻奈子・太田勝造・山田裕子 (2011) 裁判員制度と刑事司法に対する人々の意識—2011年第2波調査に基づいて『北大法学論集』62(4), 1025–1110.
- Malle, B. F. (2001). Folk explanations of intentional action. In B. F. Malle, L. J. Moses, D. A. Baldwin (Eds.) *Intentions and intentionality: Foundations of social cognition* (pp. 265–286). Cambridge, MA: MIT Press.
- Miller, D. T., & Effron, D. A. (2010). Varieties of psychological license. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 42, pp. 115–155). San Diego, CA: Academic Press.
- Miyamoto, Y. (2013). Culture and analytic versus holistic cognition: Toward multilevel analyses of cultural influences. In M. P. Zanna & J. Olsen (Eds.), *Advances in Experimental Social Psychology*, (Vol. 47, pp. 131–188). New York: Elsevier Academic Press.
- Petty, R. E., & Cacioppo, J. T. (1986). The elaboration likelihood model of persuasion. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (vol. 19, pp. 123–205). New York: Academic Press.
- Piaget, J. (1932/1965). *The moral judgment of the child*. (Translated by M. Gabain). London: Routledge & Kegan Paul.
- Pizarro, D. A., Laney, C., Morris, E. K., & Loftus, E. F. (2006). Ripple effects in memory: Judgments of moral blame can distort memory for events. *Memory & Cognition*, **34**, 550–555.
- Rai, T. S., & Fiske, A. P. (2011). Moral psychology is relationship regulation: Moral motives for unity, hierarchy, equality, and proportionality. *Psychological Review*, **118**, 57–75.
- Shweder, R. A., Much, N. C., Mahapatra, M., & Park, L. (1997). The “big three” of morality (autonomy, community, and divinity) and the “big three” explanations of suffering. In A. Brandt & P. Rozin (Eds.), *Morality and health* (pp. 119–169). New York, NY: Routledge.
- Sinnott-Armstrong, W. (Ed.) (2008). *Moral Psychology (Volume 2): The cognitive science of morality: Intuition and*

- diversity*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Tetlock, P. E. (2002). Social functionalist frameworks for judgment and choice: Intuitive politicians, theologians, and prosecutors. *Psychological Review*, **109**, 451–471.
- Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and convention*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Uleman, J. S., Blader, S. L., & Todorov, A. (2005). Implicit impressions. In R. R. Hassin, J. S. Uleman, & J. A. Bargh (Eds.). *The new unconscious* (pp. 362–392). New York: Oxford University Press.
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. (1978). *Equity: Theory and research*. Boston: Allyn and Bacon.
- Weiner, B. (2006). *Social motivation, justice, and the moral emotions: An attributional approach*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.